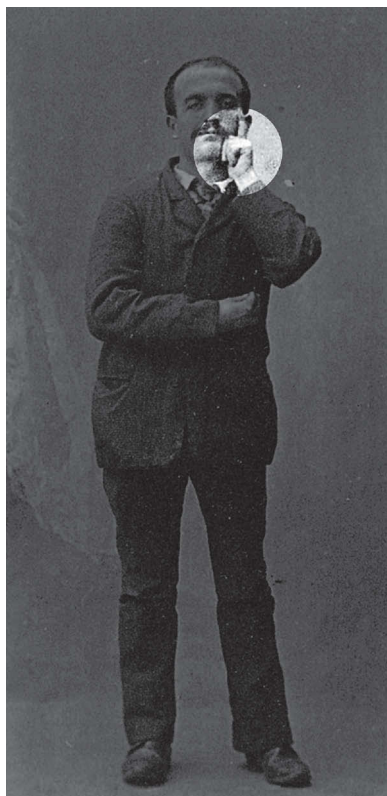


今月の表紙

河村 満^{a)}*岡本 保^{b)}菊池雷太^{c)}

ブリソー (Édouard Brissaud ; 1852-1909)¹⁾ が攣縮性斜頸の原因を器質性ではなく、精神性と考えた理由の1つは、誰にとってもとても不思議な現象である矯正手技 (試験) が明白な効果を示したことにあります。1902 年、ブリソーの弟子である、メージュ (Henry Meige ; 1866-1940) とファインデル (Eugene Feindel ; 生没年不詳) は不随意運動に関する、世界で最初のモノグラフを出版しました²⁾。この本は瞬く間にドイツ語、英語に翻訳出版され、矯正手技についても広く知られるようになりました。本の中には、斜頸に対する矯正手技の章があり、「患者は左耳に左手を当てようとすると、耳に到達する前に頭は右を向く。これは精神的な病態であることを示唆している決定的な証拠である」という記載まであります。この本の英語翻訳者はかのキニア・ウィルソン (Samuel Alexander Kinnier Wilson ; 1878-1937) でした。

今月の表紙の写真は、Destarac³⁾ の論文にあるものです。29 歳の男性で、

家族歴に異常はありません。9 歳より書痙に罹患し、18 歳で攣縮性斜頸を発症しました。20 歳を過ぎると、下位筋の攣縮 (spasm) が出現し、進行性に歩行障害がみられました。29 歳の初診時、Destarac は彼の歩行をチェコの操り人形の様である、と述べました (Fig. 1 左)。歩行時にみられる、下肢の異常運動と体幹の前弯がその理由です。左手を左頬に当てると、途端に姿勢が正されます (Fig. 1 右)。この論文で、Destarac はもう 1 例を記載していますが、それは 1901 年に報告した 17 歳の女性⁴⁾ の再掲です。斜頸・斜め骨

盤 (tortipelvis) (Fig. 2 左)、書痙、足攣縮 (foot cramp) がみられ、左手を顎に、右手を骨盤稜に当てると姿勢が改善し (Fig. 2 右)、運動により増悪します。矯正手技の効果を示す 2 症例が同時に現れたということだと思います。Destarac の示したこれらの症例は、時にジストニー／ジストニア研究のマイルストーンと呼ばれることがあります⁵⁾。ブリソー、メージュらの精神性機序説に反対する人々によって、その典型例として位置づけられたのです。

Destarac の 2 症例は、少年期に書痙に罹患し、青年期に斜頸を発症しています。下肢筋の攣縮と進行性歩行困難という点でとてもよく似ています。バビンスキー (Joseph Jules Babinski ; 1857-1932)、ピエール・マリー (Pierre Marie ; 1853-1940)、ギラン (Georges Guillain ; 1876-1961) らは、自験例の提示と共に、Destarac の症例を引用し、ブリソーの非器質的という見解に反対しました⁵⁾。しかし、ブリソーの立場はなかなか崩れませんでした。たぶん、矯正手技の

a) 昭和大学病院附属東病院, b) 富坂診療所, c) 汐田総合病院神経内科

*[連絡先] kawa@med.showa-u.ac.jp



Fig. 1 29 歳男性例の矯正手技³⁾



Fig. 2 17 歳女性例の矯正手技³⁾

効果を現在のように手軽に写真撮影などできなかった当時の人々にとって、7 例全例の写真というわかりやすい「証拠」には抗えない「魅力」があったのだと思います⁶⁾。

ブリソーやメージュの精神性斜頸の概念も、その後変化をみせます。1929 年にパリで、斜頸についての国際会議があった際には、精神説を主張したのはメージュだけであったと言われていきます⁷⁾。そのメージュもあるとき流行性脳炎の経過中に攣縮性斜頸を呈した症例を観察する機会を得て、その後は器質性機序に賛成するようになった、ということです⁸⁾。

矯正手技はどうして効果があるのでしょうか？ この疑問はいまだに明らかではありません。矯正手技の際の脳活動を PET でみた研究があります⁹⁾。頸部がもともとと曲がっていた側の上・下頭頂小葉に過活動がみられ、矯正された側の補足運動野、第一次感覚運動野の減少を認めた、とされています。大脳の広い部分の関与が示唆されます。

最後に、斜頸の歴史について簡単に述べてみたいと思います^{8,10)}。斜頸 (torticollis) という言葉は 16 世紀、ラブレの『パンタグリエル物語』に登場する、人をだます癖のために、人か

ら同情される余地のない人物を作者が「torty collis (まがった首)」と呼んだことから始まります。また、医学の分野で最初に「torticollis」が使われたのは、1737 年にチュービンゲン大学に提出された Jæger の学位論文においてです¹⁰⁾。その後、18 世紀の半ば頃より、いくつかの医学辞典などでこの言葉が採用され完全に医学用語として定着するようになりました。

「器質性なのか？ それとも精神性なのか？」この鑑別はいつの時代も、現在でも神経学における根本問題であると考えます。

文献

- 1) Brissaud E: Vingt-quatrième leçon. Tics et spasmes cloniques de la face. Meige H (ed): Leçons sur les maladies nerveuses: la Salpêtrière, 1893-1894. Masson, Paris, 1895, pp502-520
- 2) Meige H, Feindel E: Les Tics et leur Traitement. Masson, Paris, 1902
- 3) Destarac: Le syndrome du torticollis spasmodique. Spasmes fonctionnels et maladies héréditaires et familiales du système nerveux. Nouv Iconograph Salpêtrière **15**: 385-411, 1902
- 4) Destarac: Torticollis spasmodique et spasmes fonctionnels. Rev Neurol (Paris) **9**: 591-597, 1901
- 5) Broussolle E, Laurencin C, Bernard E, Thobois S, Danaila T, et al: Early illustrations of geste antagoniste in cervical and generalized dystonia. Tremor Other Hyperkinet Mov (N Y) **5**: 332, 2015
- 6) 河村 満, 岡本 保, 菊池雷太: 今月の表紙. Brain Nerve **68**: 682-683, 2016
- 7) Poisson A, Krack P, Thobois S, Loiraud C, Serra G, et al: History of the 'geste antagoniste' sign in cervical dystonia. J Neurol **259**: 1580-1584, 2012
- 8) Rondot P, Jedynak CP, Ferrey G: Le Torticollis Spasmodique. Masson, Paris, 1981
- 9) Naumann M, Magyar-Lehmann S, Reiners K, Erbguth F, Leenders KL: Sensory tricks in cervical dystonia: perceptual dysbalance of parietal cortex modulates frontal motor programming. Ann Neurol **47**: 322-328, 2000
- 10) Cruchet R: Traité des Torticollis Spasmodiques. Masson, Paris, 1907